

## 都心生まれの大正時代

塚本 福



### うちの仕事

私は、大正二年十一月二十五日、東京市麴町区有楽町二丁目二番地にあった自宅で生まれました。今年で八十四歳になります。今のJ R山手線有楽町駅の一番はずれ、新橋駅寄り改札口の日比谷側出口のすぐ前で、「小川生美堂」という名の看板屋でし

た。もちろん、小さな看板の注文が多かったのですが、時々は大きな仕事として、日本橋高島屋デパートのショーウィンドウや、正面吹き抜け階段の飾り付けも手掛けていました。帝国劇場の舞台装置もしたことがあってうちが作ったというカチューシャの舞台を見たことがあります。

父親のほかに、上野の美術学校（今の東京芸術大

学美術学部)を出た父の弟(千蔵)が腕達者で、その他住み込みの店員一名、通い二名がいて、計五人で仕事をしていました。

### 両親ときょうだい

両親は、小川経次郎・たまといいます。小さい頃は、〈おとつあん〉〈おっかさん〉と呼んでいました。おとつあんは相州(今の神奈川県)浦賀の造船所の職人でした。大きくなって男らしく、当時の花形役者「菊五郎」に似ているとかで、よく人が見にきたと母が自慢していました。

おっかさんは日本橋兜町の株屋の娘で、「半鐘どろぼう」と言われたほど背の高い人です。むろん父が年上で、十五歳も違う二人でしたが、喧嘩したのを見たことはありません。とても仲の良い夫婦でした。

父は母のことを物凄く大切にしていましたから、母はとても幸せだったと思います。例えば、朝は、

みんな父が子供たちに御飯を食べさせ、女の子全員  
の髪を父が結ってくれました。今考えると、父はと  
ても協力的で、家庭的で、本当に現代的な人のよう  
に思われます。父は、いつも母のことを「山の神、  
山の神」と呼んでいましたから、私はずっとそれが  
母の本名なのだと思いました。母は父が帰  
宅するのを玄関で待っていて、パチンと二人で手を  
合わせては出かけました。一人で歌舞伎座を見に  
行っていたのです。夕飯の世話は父と姉がしまし  
た。私が歌舞伎好きになったのは、母の話のせいだ  
と思います。

この夫婦から、九人も子どもが産まれました。一  
番上と一番下が男で、あとは女ばかり七人。私は、  
戸籍の上では五女になっていますが、実際は姉に当  
る二人が赤ん坊のとき亡くなっていたので、三女と  
して育てられました。ちょうど真ん中の子だったので、  
友だちからは「まんなかまぐそ」とからかわれ  
たものです。

私は、「福」という名を貰いました。男の子みたいに元気で、「おへちゃ」でした。両親は、とても可愛がってくれました。数え七つのお祝いのときには、チリメンのきれいな長いたもとの着物を着て、家の前から人力車で父の膝の上に乗る、赤坂山王の日枝神社にお参りしたことが大変嬉しくて、今でも忘れることが出来ません。ほかに、神社の祭りなどへ行っただけではありません。近所に八幡様など無かったですからね。銀座も近かったのですが、遊びに行った記憶はありません。遊び相手は、家の中にたくさん居ましたから。

女の子の中では、一番上の姉が一番美人でした。数えはたちの年に、新聞広告の花嫁募集に面白半分応募したところ、たちまち気に入られ、さらわれるように結婚してしまいました。しかしその後は、あまり幸せでなかったと聞いています。

私の後に二人の妹が生まれ、そのあと大正十二年の夏に、私とは十歳違いの弟が生まれました。その



年のお正月に、日枝神社から矢を二本戴いて生まれたので、「矢二郎」と名付けられました。矢二郎が生まれた時の父の喜びようといったらなかったですね。何しろ、女の子ばかり七人も続いた後だったのですから。

### お引越

引越す前の家からは、日比谷公園の門がよく見えきました。その公園を通過して一年間だけ日比谷小学校へ通いました。五、六歳の頃、つまらなくなると有楽町の駅の改札口へ行き、日が暮れるまで、降りするお客をぼんやり見ていたことを思い出しま

す。今と比べたら、お客の数はとても少なく、電車の数も三台連結ぐらいではなかったでしょうか。

大正十一年、私が小学二年生のときに、淀橋区諏訪町に家を買ってそこへ引っ越しました。山手線高田馬場駅の近くで、練兵場だった戸山カ原のそばです。子沢山で住みにくかったから、広い家が変わったんだと思います。もっとも工場や店は、元のままでした。

本当の買主は千蔵叔父です。叔父は美校在学中に帝展（今の日展）に入選したことがあるほど上手な絵画きで、本当は画家として一人立ちしたかったようですが、家族を食わせるために泣く泣く看板屋になった人です。しかし、画家との交際は続けていて、仲間の一人から、植木置場があった二〇〇坪の土地の上に建ててある二階屋を三〇〇円で買い、家族がそこへ越したのです。アトリエも付いていましたが、土地は借地でした。

私は、戸塚第二小学校の二年生に編入しました。

何しろ、屏をくぐって行くとすぐ学校でしたから便利でしたね。こっちの学校の子は、商人のほか、職人、軍人、勤め人など、いろいろな混じっていました。遊ぶところは、なんていったって戸山カ原ですね。大きい山がありました。三角山という名で、てっぺんから滑り降りるのが面白くて。それから、ドッジボールがはまりましたよ。ぶつけた相手の名前を今でも覚えていて。二、三年生の頃は、校庭に桜がいっぱいあったので、花びらが落ちたのを輪にして遊んだのを覚えていますが、勉強のことは、ほとんど覚えていません。

### 関東大震災

私が三年生の九月、関東大震災が起きました。庭で遊んでいると、ゴースという凄い音がして大地が揺れ出したので、慌てて家の中へ飛び込みました。その直後、屋根から瓦がばらばら落ち出しました。母がすがりつく子ども全員を抱えて、「死んだ

らみんな一緒だよ」と何度も繰り返しました。揺れがすこし収まったところで屋根瓦を越えて外へ飛び出し、庭の石にかじりついていました。揺り返しが何度も来るものですから、何日かは外で蚊帳を釣って寝たものでした。しかし、幸いなことに家は倒れず、火事にも遭いませんでした。

だが有楽町の工場のほうは、つぶれて焼けてしまいました。困ったことに、あの辺も、下町全部も焼け野原になってしまいましたから、看板の注文がさっぱり来なくなっていました。

仕方ないので、隣人のついでで「タバコ屋」と「おせんべい屋」を始めたところ、みんな食べ物には飢えていたんでしょうか、とてもよく売れて成功したそうです。

## 女学校へ

五年生になってから、担任の先生が特別に補習授業をして下さって、そのおかげで東京府立第五高等



女学校（今の都立富士高校）に合格できました。同じ学校から幾人受けたか分かりませんが、合格したのは三人だけだったので、とても誉められました。

他の友だちは、川村とか淑徳とかいった私立の女学校へ行くか、小学校の高等科へ進みました。

私は、山手線で新宿駅まで乗り、そこから歩いて歌舞伎町にあった女学校へ通いました。木造でした。大きくて立派で、しゃれた本館のほか、平和館や記念館もありました。それが大正の最後、十五年春のことでした。

一年生の夏、水泳訓練の合宿がありました。学校の寮がある沼津の千本松原へ行ったのです。皇室の

御用邸のすぐ近くだったと思います。海岸に並んで、先生がまず平泳ぎの型を教えて下さいました。その格好をしながら海に入ったら、すぐに浮いて泳げたのです。子どもたちは、「嘘だ」といって信じないのですが、本当のことです。顔を水に付けないから、恐くなかったのでしょうか。

四年生になったとき、父親が倒れて入院しました。胃癌だったようで、まる一年間も病院暮らしでした。その間母はずっと付き添っていて、一日も帰宅したことはありません。当時まだ十八だった二番目の姉が、母に代わって家中全部のきりもりをやってくれたのですが、たいしたものでした。父は最後に自宅に戻り、三日目に亡くなりました。六十三歳でした。

私は本当は、昭和六年に卒業するはずでした。ところが、弓道部で弓を引くのに夢中になり過ぎ、よいかいた汗の始末が悪かったためか肋膜炎にかかり、五年生の一年間休学してしまいました。お友だちが

よく見舞いに来てくれて、私の寢床の回りに制服のまま寝そべっておしゃべりしました。皆は、「家ではやかましくて、こんなこと出来ないけれど、あなたの家は自由でいいわね」と言ってくれました。休学のため修学旅行へも行けず、残念なことをしたのですが、翌年には治って次の学年の五年に復学し、昭和七年に卒業しました。先生が同情して下さい、私には前の学年と後の学年と二種類の卒業アルバムを下さったので、今でも大切に持っています。

お陰様で友だちが二倍に増え、卒業後の付き合いも幅広くなって、とても得しました。今となっては、休学もいいもんだなあと思っています。

(以上、塚本福が語ったものを、湯沢雅彦が聞き取って整理したもの。塚本福は元東京家庭裁判所事務官で、湯沢雅彦の義母にあたる)